

二〇一三年七月十二日 開催

「街角でふれるコトバと社会」シリーズ 第3回——東アジア言語グループ

言葉から知る現代中国 「和諧社会」

飯島典子

■ 講演者……飯島典子(広島市立大学准教授)
■ 司 会……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

はじめに

流行語が社会を知るキーワードになるのは世界共通と言ってもよいが、中国社会を知るもう一つの分かり易いアプローチとしてその時代時代の政府が打ち出すスローガンを追いかけるという方法がある。一九八〇年代から改革開放が進んで市場経済が取り入れられたとは言え、中国はなお共産党政府が打ち出すスローガン、キャンペーンが社会のあり方をも左右する重みを持っているのである。字の並べ方や字面で何かを完結に表したり訴えたりするのは漢字の得意とする所で、換言すれば中国語は明に暗にキャンペーンを張るのに向いている言語と言えよう。こうしたスローガンは現代中国語の口語が分からない者にとっても中国語圏以外の人々が二一世紀

の中国社会を知る上でも極めて有効な手がかりとなっている。ここではこうしたスローガンを紹介すると同時にそれが打ち出された背景を考察し、またそのスローガンにただ唯々諸々と従っている訳ではない庶民の反骨精神の現れも取りあげ、中国政府の意図する政策の一端を政府と民間の双方から考えてみたい。

さて、近年中国のみならず、世界経済を表すキーワードの一つに「格差社会」が挙げられるといっても異論のある向きはないであろう。周知のようにこれだけ物、人、情報が国境を越えて移動すると、経済発展が著しい国ほど格差の開きも大きい事は言を俟たない。ましてやEU加盟国がすつぽりに入るほどの広大な領土を持つ中国においては、文化の多様性、どの程度経済発展の恩恵に浴することが出来ているか、に關しても著しい地域の多様性があり、経済格差が生じない方が不自然であろう。経済格差の是正は何も中国だけの問題では



講演する飯島先生と、林先生

会」を意味する「和諧社会」というスローガンを掲げた。具体的な目標として二〇二〇年までに一、法治 二、地域格差拡大を是正 三、社会保障制度の完備 四、道徳文化資質の向上 五、資源利用の効率化を実現 六、経済格差とその是正 七、環境保護 八、持続可能な発展 九、節度ある社会を挙げたのである。

以下、中国社会がこうした社会の歪みをどのような言葉で表現しているか、を考察してみよう。

ないし、格差がモチ

ベーションとなって民間人の経済を活性化させる側面があるというもの、あまりにも大きな格差を放置しておけば反政府暴動の温床を用意するようなものである。政府と云えども全く手をこまねいてこの事態を静観している訳ではなく、二〇〇六年、当時の胡錦濤政権が「調和の取れた社

青山白石化

一九八〇年代以来の改革開放政策の流れによって中国が著しく経済発展を遂げたのは周知の通りだが、それまで政府には迷信とされてきた伝統文化が復活しつつある、という側面も見逃せない。その典型的な例が風水である。日本で風水という側面が強調されがちだが、それは香港など限られた土地で風水を実践するという些か特殊な事例である。中国で風水というのは古いと言うより環境活用という側面があり、山村の村落の場合など村全体の地形を考慮して、どこに墓を建てるのが良いか、を見立てるのが風水師の大事な仕事になっている。中国風水では墓（陰宅）の風水が縁起のよい土地だと、生きている人々の家（陽宅）にも幸運が訪れると信じられているので、墓の位置（都市部と異なり、農村では山地に自由に墓を掘って土葬にしてもよい）は住民の重大な関心事である。こうした風水を精神文化と考えれば一笑に付す訳にはいかないのだが、環境保全という側面から考えると野原に勝手に墓を建てられると美観に関わるのもまた事実である。人々が風水のよいスポット、「宝地」を見つけるとそこで樹木を場伐採し、同じ場所に競って墓を建てるため、当然ながら周囲の草は青々としているが、風水宝地の部分だけが墓石が集中している不自然な景観を呈してしまい、伝統文化の復興が皮肉に



写真1: 青山白石化 遼寧省鳳城市A村 2008年8月16日 緒方宏海氏撮影

も農村の美観を損ねているという結果となっている。周知のように、第二次世界大戦後、特に文化大革命（一九六六〜七六）の間は風水が「迷信」として否定され、風水鑑定をすることも禁じられていた。改革開放以後、徐々に一度は「迷信」として否定されていた文化が復興するが、風水はその好例である。

しばしば中国語は詩に適した言語と言われるのは、前述し

たように僅かな漢字で作者が言外に込めた意味を読者に伝えることが出来るという特徴から来ていると思われるが、こうした「言外の訴え」はこうした墓地の乱立を嘆く「青山白石化」という言葉に象徴されている。この「青山白石化」という言葉を良く見て貰いたい。僅か五字の中に青・白、山・石と対とも言える漢字が巧みに配置されていることにお気づきだろうか。人間の身勝手さを表すのに、人という字を使わずに青・白、山・石と対象をなす字を配することで文学的な美しさを表現しつつ言外に嘆きを表す手法は漢字が得意とする所だと言えよう。

文字に頼らない言葉——欧米発の「記号」も中国語の一部？

さて、社会の現状を嘆くだけでなく、啓発を促すのも標語の役割だが、世界的にメールでの顔文字が定着した今や文字言語と視覚言語の境界は曖昧なものになりつつある。時としてシンボルマークが文字言語以上に告発、啓発の力を持つ例もあり、欧米発であろうとも世界的に共通言語となったシンボルは時として中国でも標語という「文字」以上に訴える力を持つという例を挙げてみよう。

次頁写真2の図に描かれたリボン¹⁾は、もう説明の必要もないと思われる、エイズ患者に対する理解と支援のシンボル、レッドリボンである。エイズ伝染の原因は売春や同性愛者間



写真 2: エイズ啓蒙と理解を訴えるレッドリボン 遼寧省長山諸島B村 2008年8月11日 緒方宏海氏撮影

の交渉、ないし注射器の回し打ち、というのが感染拡大当初、社会一般の認識だったが、このレッドリボンが上述のどれともあまり関係なさそうな遼寧省の、しかも離島の家に描かれている点は中国の特殊なエイズ蔓延の経歴を象徴している。エイズ患者が中国の中でも貧困地域に集中しているのは貧しい地域で「売血」が結構な収入源になるためである。一回の八〇〇ccの売血で得られるのが年収の二%と書けば、それが

如何に魅力的か想像して貰えるだろうか。勿論採血方法そのものは安全であった。提供者の血液は血漿と赤血球に分かれ、赤血球は再び提供者の体に戻されるので貧血の恐れもない筈なのだが採血された血液が遠心分離器にかけられた際、他人の血液と混ざってしまったのである。⁽²⁾

レッドリボンは今や既に定着した感のある世界共通のシンボルだが、スマートフォン利用がこれだけ普及して世界どこにいてもメールのやりとりが出来る環境が整ってくることによって顔文字が今や文字の一部になってゆく現状を考えると、こうした世界的なキャンペーンに用いられるシンボルも文字を超えた「世界共通言語」になってゆくのもかもしれない。

敏感語

和諧社会のスローガンに庶民が真つ向からアンチテーゼを突きつけるのはやはりネットの世界である。政治的に敏感な問題を孕む検索語「チベット」自体の検索は問題ないが、「チベット独立」や「ダライ・ラマ」などはヒット件数が極端に少なくなることがある。サイバー警察の検閲をくぐり抜けて社会の問題をネットで告発するブロガーもいるが、彼らも当然ながら対抗策を考えている。具体的な例から示してみよう。

一・曖昧検索を逆手にとってもらう 中国の民主化と切り



写真3: 和諧社会の重要性を謳った記念碑 遼寧省鳳城市A村付近 2008年8月16日 緒方宏海氏撮影

離せない天安門事件(一九八九)⁽³⁾を検索しようとする場合、単純に「天安門事件」と入力するのではなく、「天安門」「天安 門」「天安*門」などと入力することで、政府を批判するブロガーのサイトに行き着ける確率は格段に上がる。検索語の間にスペースを入れることで曖昧検索をかけることが出来る裏技を利用したもので、ヒットするサイトを増やすことが出来る。

二. 同音異義語を利用する 和諧↓河蟹 両方とも hexie

という音で前述の天安門事件とも関係があるが、「民主」が敏感語扱いされる場合もあるが、その場合どのように検索を掛けるのか? 民主を併音(中国語のローマ字表記)で表すとMin zhuになるのでMzをキーワードにするのである。⁽⁴⁾

三. その他 更に漢字の国ならではのテクニックもある。

二〇一一年ネット空間に***という見慣れない検索語が登場した。これはアラブの民主化を誘発する契機となったジャスミン革命にヒントを得たものである。中国では多少、検索を自国で制限できるが、こうもネットが発達した社会にあつてはジャスミン革命は天安門事件を想起させ、決して対岸の火事ではないのである。勘の良い読者諸兄諸姉は既におわかりであろうが、ジャスミンは中国語で書くとな茉莉花。つまり***はジャスミンの隠語であり⁽⁵⁾、それは取りも直さず民主化に本腰を入れない政府への批判なのである。

終わりに

「和諧社会」を一言で日本語に直すのは難しい。意味を取つて「格差を是正し、調和の取れた社会」とする訳が王道なのかも知れないが、政府が小手先の経済政策を弄して個人や地域の収入の格差を是正しようと試みることで調和の取れ

た社会の実現に繋がる訳ではないのは明白である。伝統文化の復活―ここでは風水だが―故に起こった環境破壊、急速な経済発展に取り残されまいとする農村の売血によるエイズの蔓延、政府批判とそれに応じる庶民のネット活動など、和諧社会を巡る問題も多種多様であることは既に述べた。

ただし、中国に限らず社会問題に向き合う人々の姿勢も進歩し、その表現、発信方法も多様化している。中国語は漢字を使うと同時にその音も日本語より遙かに多い。豊かな漢字と音声（前述した同音異義語を巧みに使うネットの検索のあり方）の双方を生かして社会へ問題を提起しており、同時に世界の他の国と同様、文字以外の「記号」も今や言語の一つとなっている。

考えてみれば世界の主要言語の殆どが表音文字を使っている中、表意文字だけを使う中国語は特殊な言語であるかもしれない。また音声が多く日本人にとって発音もマスターするのも容易ではなく、漢字からの類推に頼っておおざっぱな読解を除けば寧ろ日本人にとって学習しづらい言語と考えられ始めた感がある。しかしここまで読んで頂いた読者諸氏には漢字と音声の豊かさこそが中国語表現を豊かにしていることも少しお分かり頂けたのではないかと思う。と同時に和諧社会を巡る表現の言外に含まれる憂いは世界の人々が抱える諸問題とも多く共通するものなので、読者諸氏にもこうした

言葉が決して中国独自の狭隘な憂国から来るものではないことを分かって頂けたら幸いである。

(1) 注

レッドリボンはヨーロッパに古くから伝わる風習で病氣や事故で人生を全うできなかった人への追悼の意を表す為に使われていたが、エイズが蔓延しだした一九八〇年代のアメリカ、とりわけニューヨークのアーティスト達がつけるようになり、エイズに対する理解と支援のシンボルとなっていた。

www.weblio.jp Weblio 辞書 2013.10.16. アクセス

www.city.kure.hiroshima.jp 呉市保健所 レッドリボン

の話 2013.10.16. アクセス

(2) 山本秀也『本当の中国を知っていますか？ 農村、エ

イズ、環境、司法』草思社 二〇〇四 一四七―一四八頁。一回の売血で得られるのは日本円にして六〇〇円程度だが、年収が三万ほどの農民にとっては二%にもなる。

(3) 一九八九年六月、当時の胡耀邦主席の訃報を受けて、

その民主化に理解を示した同主席の生前の業績を偲んで天安門に集まった学生がそのまま民主化デモを行っ

- た際、共産党が戦車を導入して弾圧した事件。中国の民主化を考える上で避けて通れない事件であり、当時の民主化運動に関係した人々は多くはアメリカやフランスなど海外に亡命したままである。
- (4) NHK ドキュメンタリーWave「沸点中国プロガー」
2011.11.5放送
- (5) 高原明生「中国メディアの今 冷静な言説育つ兆しも」
朝日新聞 2011.10.29.夕刊

韓国の街角で出会うことば「약(葉)」

林 史樹

■講演者……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

■司 会……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

韓国にみる「健康信仰」

韓国でもっとも多くみかける看板は何だろうか。花屋を意味する「꽃(花)」、あるいは「담배(タバコ)」だろうか。「P C방(ネットカフェ)」や「노래방(カラオケ)」も多くみかけるし、「부동산(不動産)」も目につく。それでも、ずっと以前からいわれてきたものに「약(葉)」がある。これは日本でいう「薬屋」、あるいは「薬局」のことである。

葉の看板がよく目につくのは韓国の人々が薬局に依存し、それだけ社会で必要とされているからにほかならない。そこでは、さまざまなドリンク剤が販売されており、種類もジュースに近いものから、滋養強壮や栄養補給といったサプリメント感覚で飲まれるものまで多種多様である。それくらい韓国の人たちの間では健康が関心事になっており、実際に「健康のため

なら死んでもよい」といった笑い話まである。カラスが精力増強に効くといわれた途端に、町中のカラスがいなくなったといった噂話まで流れる。このような韓国の人たちが一番弱いことばといえば「몸에 좋다(体によい)」である。嫌がって口にしない料理も、まことしやかに効能を説いて、この料理は「体によいのでおあがりください」といえば口にすることまでくれば「信仰」といえなくもない。さらに、東洋の漢方医学に大きな影響を与えた『東医宝鑑』の著者、許浚を輩出したように、漢方の伝統が息づいている。町中に行けば、各個人用に調合された漢方薬を煎じて、一回ごとのパック詰めにしてくれる「건강원(健康院)」まである。そのほか、生薬を扱う市場が多く集まってできた「약령시장(葉令市場)」も多くの人々にぎわう。韓国の人々の生活は、葉と切っても切れない関係にある。



講演する林先生と、飯島先生



大きく「薬」と書かれた街角の薬局の看板

韓国社会における「薬」

それでは、「薬」には一体どのような意味があるのだろうか。韓国社会における「薬」の概念、「薬」の使われ方についてみていく前に、まずここで『広辞苑 第5版』（岩波書店、一九九八年）から日本語の薬についてみることにする。

（一）説に「くすし（奇）」と同源か）①病気や傷を治療・予防するために服用または塗布・注射するもの。水薬・散薬・丸薬・膏薬・煎薬などの種類がある。②広く化学的作用をもつ

物質。油薬・火薬・農薬など。③心身に滋養・利益を与えるもの。

比喩的に用いる。④ちよつとした賄賂、鼻薬。⑤ごく少量のたとえ。

一方、韓国の『ウリマル大辞典』（語文閣、一九九二年）によれば、次のようになる。

①病気や怪我などを治したり、予防したりするのに用いる物質。飲んだり、塗ったり、注射したりする。②火薬。③細

菌、虫、獣などを殺す物質。ハエ薬、シラミ薬、ネズミ薬、農薬など。⑤靴クリーム。⑥酒の俗語。⑦アヘンの俗語。⑧賄賂の俗語。

日韓ともに①治療のための物質、火薬や害となるものを駆除するための化学物質、賄賂、麻薬といったところが共通している。日本語には「わずか」という意味が含まれている一方、韓国語には「酒」の意味が含まれているが、これに関しても、日本で「酒は百薬の長」といわれたり、韓国でも薬に少量の意味をもたせた諺があったりすることから、両言語でほぼ重なった意味で「薬」が用いられているといえる。

しかし、「薬」には辞書に載っていない重要な意味がある。たとえば、韓国で「薬」が用いられることばを探すと、ミネラルを豊富に含んだ山からの湧き水を「약수(薬水)」といって重宝する。しかし、これは必ずしも健康維持のための薬と考えているのではない。清らかな水、霊験あらたかな水という意味が含まれてくる。そのほか「약주(薬酒)」や「약과(菓菓)」、「약밥(菓飯)」などが思いつく。薬酒は、日本語で菓草が入った薬効のある薬用酒を意味するが、韓国語では上等な酒という意味で清酒を指すときなどに用いられる。菓菓とは、小麦粉に蜂蜜や水飴を入れてこね、ゴマ油で揚げた伝統菓子のことをいい、栄養価の高いあるいは原料のよい菓子となる。菓飯は、菓菓同様に、蜂蜜、黒砂糖、ゴマ油、醤油、

栗、ナツメを入れたおこわのことで、体によいとされ、宮中料理などにでてる。

以上のようにみると、どうも韓国語という「薬」には、辞書的な意味合いのほかに、「上等なもの、(体に)よいもの」という意味が含まれていそうである。まさに「약고추장(薬コチュジャン)」がよい例で、고추장(コチュジャン・唐辛子味噌)でも、糯米を原料にして普通よりも唐辛子を多く入れてつくった良質のコチュジャンのことを指す。

日本語にも「毒にも薬にもならぬ」といった諺があることから、「薬Ⅱ(身や自分自身にとつて)よいこと、よいもの」といった意味合いが含まれていそうであるが、韓国語では、それがもつと明確に表れている。

それでは、諺にでてくる「薬」にはどのようなイメージがあるのだろうか。

◆개똥도 약에 쓰려면 없다(犬の糞もいざ薬に使おうと思うとない)

↓普段は大したことがないものでも、いざ必要なときにはないこと。

◆약은 나누어 먹지 않는다(薬は分けて飲まない)
↓薬でも何でも分けて飲めば効能が半減してしまうということ。

- ◆ 모르면 약이요, 아는 게 병 (知らなければ薬、知れば病) 知らぬが仏、病は気から)
 - ↓ 何事も知らなければ心が薬に過ごせるが、知れば気になるし、気を滅入らせること。
- ◆ 약방에 갑초 (藥屋に甘草)
 - ↓ 漢方薬局に甘草が不可欠であるように、どのようなことにも首をつっこむ人間、でしゃばり、欠かすことができないものこと。
- ◆ 입에 쓴 약이 병을 고친다 (口に苦い薬が病気を治す) 良薬は口に苦し)
 - ↓ 耳の痛い忠告こそが、自分にとってよいということ。
- ◆ 병 주고 약 준다 (病気を移して薬を渡す)
 - ↓ 自分で災いをもたらしておいて、それに救いの手をだして善行のふりをする事。
- ◆ 약은 빚 내어서라도 먹어라 (薬は借金をしてでも飲め)
 - ↓ 健康第一で金をいとわず薬を飲むように、時を逃がさずに行動しろということ。
- ◆ 약 팔다 (薬を売る)
 - ↓ 薬売りが効能を述べ立てるように、口達者に話をする事。
- ◆ 성복 뒤에 약방문 (喪服の後に薬屋の門) 葬式済んで医者話)
 - ↓ すでに後の祭り、対処が遅れたということ。

以上のように、いずれもユニークな諺であるが、薬が身近に感じられる諺がいくつもでてくる。「口に苦い薬が病気を治す」のように日韓で共通する諺もあるが、「薬は借金してでも飲め」などからは韓国社会の健康志向がみとれる。したがって、「薬を渡す」ことはたとえ病気を移した後でも、効果の高い行動となる。なぜなら、「知らなければ薬」が「病は気から」にも通じるように、気持ちを保つものが薬だからである。「喪服の後に薬屋の門」なども、日本の諺では医者が出てくるが、韓国社会ではまず薬であるところが興味深い。

「보약(補薬)」をめぐる

韓国には「보신(補身) 体を健康に保つこと」という考え方がある。この語から犬肉料理として有名な「보신탕(補身湯) 犬肉鍋」が生まれているが、この補身湯は日本という「土用の鰻」と同様で、夏の盛りである「삼복(三伏) 三つの伏日」の日によく食される。この補身という考え方が、これを実現する「補薬」 体を健康に保つための薬」とともに、韓国の健康信仰を支えてきたといえる。

補身や補薬と関係し、韓国の日常生活には生薬が入り込んでいる。まさに医食同源ならぬ、「약식동원(薬食同源)」の実践である。夏バテに効くといわれる鶏一羽を煮込んだ料理「삼계탕(參鷄湯)」には、生薬として인삼(高麗人參) 以外に



街角には昔ながらの漢方薬棚をおく薬局も多くみられる

「葛根」(ニンニク)「大蒜」や「ユズ」(唐辛子)「蕃椒」は生薬の一つである。

以上のように、韓国社会では日常的に生薬を多く目にする。

たとえば、一九八九年のデータであるが、李龍一らが行った調査では、回答者のうち「補薬」として漢方薬の服用経験がある者が六四・四％で、病気の治療のために漢方薬の服用経験がある者が五七・二％であった。効果についても、何らかの効果があつたと感じた者が八割に達し、極めて効果があつたと

回答する者も五割を越している[李龍一ほか 1991: 36-39]。漢方薬服用経験者の全人口に対する割合が記載されていないが、韓国 Gallup 調査研究所が一九九六年に二〇歳以上の男女に対して行った「漢方薬服用経験に関する調査」でも、七七・七％の人々に服用経験があり、五〇歳以上では八四・二％にも及んでいる[韓国 Gallup 調査研究所 1996]。実際に現地でも尋ねても多くの人々が漢方薬の服用を経験していた。

人々にとっての「身土不二(身土不二)」

韓国社会において医食同源と同じく高い関心が特に持たれているのが、身土不二である。もともと、身土不二とは「身体(身)と環境(土)とは不可分(不二)である」という意味で、自分の足で歩ける身近なところ(三里四方、四里四方)で育つたものを食べ、生活するのが、体のためによいという考えである[山下 1998: 1]。つまり、生物とその生息している土地、環境とは切っても切れないことをいっている。農業と密接に関わる語が、韓国では食に対する思想、信条として用いられているのである。

たとえば、韓国のコメには身土不二のマークが入っていたりするが、韓国ではとくに国産の生薬が一番よいという認識が強くある。彼らが身土不二を意識するようになったのは、一九八六年から開かれた G A T T のウルグアイ・ラウンドで

韓国が農産物輸入の開放を迫られ、韓国の農協が身土不二を掲げて、国産の優秀性を韓国の国民に訴えかけたのが始まりと聞く。先の山下「1938:157」によれば、一九八九年以降、韓国で盛んに用いられるようになったという。農産物市場を開放する妥結を行った一九九三年を前に大衆歌手のペ・イルホが「身土不二」を歌い、一九九三年には「歌詞大賞」の「国家愛部門」を受賞する。

自国の農産物保護のレベルから始まった身土不二で、韓国で生まれ育った人は、韓国の土壌や水で育ったものに積極的
に目を向けて、取り込んでいこうとすること自体は決して悪いことではないと思われる。ただ韓国の場合、身土不二が「国産がよい」、「韓国のものがよい」といった、「外国」に対して排他主義をとるナシヨナリズムと強く連動した。

グローバル化が進むことでとかく遠方を見据えがちとなり、また手間をさけ、即効性を期待し、漢方の伝統が根づいている韓国社会でさえ西洋薬を服用する率が圧倒的になっている。しかし、この身土不二を振り返ってみたとき、身近にあるもので、健康を維持できるといえる。つまり、健康の源はごく身のまわりに落ちているのであり、もつと土地に根づいたところを再認識すべきと教えてくれている。また韓国でもそうであるが、漢方は高価というイメージがある。しかし、これも薬食同源、つまり食することが健康につながると考えれば、

これほど安い健康法はないともいえる。

最後に

身土不二がナシヨナリズムに結びつけられるのは平和的でないが、身のまわりをみなおすことにつながることは意識したい。先述の薬の概念につながる「薬酒」ならぬ、「薬」が転がっていないか。信仰のレベルまで到達するのは問題である



高麗人蔘が有名な錦山で小売りも行う漢方薬の卸市場

が、たまに遠出して体によい空気「葉気」と心安らぐ景色「葉景」をみて、健康を保つのは現代人にとつて必要なことであるろう。その意味で、隣国の考えにふれることは悪くない。

葉を通してみること、韓国社会に広く支配的な健康信仰に始まり、人々と葉のつきあい方、補葉や葉食同源の視点から食することで健康を保とうとする考え方にふれることができた。さらに、漢方薬と親しんできた風土と、それを支えてきた地産地消にもつながる身土不二、そして、農産物輸入を契機に煽りたてられたナシヨナリズムまで、葉は韓国社会とそこで暮らす人々に密接に結びついている。

参考文献

李龍一ほか

一九九一「都市地域住民の韓薬服用実態とこれに影響を及ぼす要因分析」大韓保健協会『大韓保健協会誌』第17巻1号、pp. 32-49 (韓国語文)

新居裕久

二〇〇〇「医食同源」『ゲェスタ』39号、pp. 68-73

油谷幸利ほか編

一九九三『朝鮮語辞典』小学館

新村出編

一九九八『広辞苑 第5版』岩波書店

ハンゲル学会編

一九九二『ウリマル大辞典 第2版』語文閣(韓国語文)

林 史樹

二〇〇四「現代韓国社会における、健康信仰」日本海学

推進機構編『みんなくサテライト』とやま報告書』pp.

8-11

二〇〇四『韓国のある葉草商人のライフヒストリー』御

茶の水書房

二〇〇七『韓国がわかる60の風景』明石書店

韓国 Gallup 調査研究所

一九九六「漢方薬服用経験〈漢方医療に対する国民世論

調査〉(韓国語文)

山下惣一

一九九八『身土不二の探究』創森社

東京外国語大学朝鮮語学科研究室編

一九八四『朝鮮語慣用句集(上)』東京外国語大学

一九八五『朝鮮語慣用句集(下)』東京外国語大学